

ス リックやレース用ハイグリップなど、ハイスペックなタイヤほど性能を發揮するためには、温度や空気圧の管理がシビア。

そこで必要なのが“タイヤウォーマー”。モトGPや耐久レースの映像等で、走行直前までタイヤに巻かれているシートでお馴染みだが、トップカテゴリーで高いシェアを誇るのが『カピット』だ。

タイヤウォーマーは、ものすごくザックリ言えば「電気毛布」と同じ構造で、電気で発熱する熱線が生地に縫い込まれている。そのため、どのブランドも大きな違いはないように思われるが、トップチームがカピットを選ぶのに理由がある。

それは徹底した“温度管理”。一般的なタイヤウォーマーは、サーモスタットと呼ばれる温度スイッチで、おおむね70～80℃の範囲で電源をオフして温度を管理している。しかしこの方式は過熱と放熱を繰り返すため、当然ながらその時々で温度にムラができるやすい。また、サーモスタットの動作精度やスイッチング限度回数、外部要因による故障



MOTO CORS  
Presents

# 好きだから、こだわりたい

レースでは“常識のタイヤウォーマー”だが、その作りと性能は千差万別

カピットの温度管理へのこだわりは、プロにもホビーライダーにも大きな恩恵をもたらす

PHOTO:K.MASUKAWA TEXT:KITOH

購入後3年間（スマートは2年間）の保証付き

など、外観からは気付きにくい不具合が起こる可能性も否定できない。対するカピットは独自の技術により、サーモスタットを使わない「継続加温型・恒温管理方式」。ヒートケーブル自体が温度管理を行い、電源を断続することなく一定の温度でタイヤを温め続ける。そのためタイヤ内圧の変動も起こらないのだ。

コンセントに差すだけでタイヤの温度を正確に管理をしてくれるのは、忙しいレースの現場では便利。カビットではそんな“ダイレクトプラグイン（85℃固定）”に加え、40～110℃まで1℃単位で設定できる一体型サーモコントローラの「ビジョン」と、プロユースの別体型サーモコントロールの「レオ」もラインナップする（ステレマ、マキシマ、ファクトリーの各グレードに用意）。……とはいっても、ライダーは“レースなんではないから関係ない”と感じる方も多いはず。

しかしサーキットのスポーツ走行はどうだろう？“タイヤの温め”はタイムを競うためだけでなく、転倒回避にも極めて重要。だから高性能なタイヤウォーマーは、ケガやマシンの破損を抑止するのに有効な投資なのだ。

そして“ワーカスと同一の機材”といふのも、趣味人には嬉しい限りだ。

製品名	温度調整	価格税込
スマート	ダイレクトプラグイン（85℃）	3万7400円～
スープレマ	ダイレクトプラグイン（85℃）	2万7280円～
スープレマ・ビジョン	一体型デジタルサーモコントローラ（40～110℃）	5万5880円～
スープレマ・レオ	別体型デジタルサーモコントローラ（40～110℃）	14万6780円～
マキシマ	ダイレクトプラグイン（85℃）	7万7880円～
マキシマ・ビジョン	一体型デジタルサーモコントローラ（40～110℃）	10万8680円～
マキシマ・レオ	別体型デジタルサーモコントローラ（40～110℃）	17万2480円～
ファクトリー・ビジョン	一体型デジタルサーモコントローラ（40～110℃）	14万580円～
ファクトリー・レオ	別体型デジタルサーモコントローラ（40～110℃）	17万9080円～

購入後3年間（スマートは2年間）の保証付き

## タイヤを“温める理由”を深く理解し、とことん追求

ワンピース構造により価格を抑えたベーシックタイプだが、表層やヒートケーブルの品質、サーモスタットを用いない恒温管理方式は上級モデルと同じ。サイズ展開も4インチボケバイからMotoGPまでカバーし、8種類のカラー、ノーメックス耐熱仕様など豊富なラインアップを揃える

ホビーからプロライダーまでカバーするベーシックモデル  
**CAPIT**  
スープレマ



MotoGPチームも信頼!  
同社の技術を詰め込んだ  
ハイエンドモデル  
**ファクトリー・レオ**

タイヤへの密着性が高いマキシマの立体縫製+3ピース構造に加え、専用のヒートケーブルとレイアウトにより、スープレマやマキシマより早い加温性能と高い保温性能を発揮。別体のサーモコントローラーボックスやホイルラック等との組み合わせで、ピットやパドック内にタイヤウォーマーシステムを構築出来る



温度表示する一体型  
コントローラーで、機動性に優れたハイスペックモデル  
**ファクトリー・ビジョン**

タイヤウォーマー本体にサーモコントローラーを内蔵する“ビジョン”は、タイヤ表面温度を常時表示。設定温度に達してから10分経過した後はタイヤ表面温度と℃マークを交互に表示するのでタイヤの加温・保温状況を素早く把握することができる

